ＳＣＴ－Ｂの反応パターンとＰ－Ｆスタディ[1]

小　林　哲　郎

１．はじめに

ＳＣＴ－Ｂは精研式文章完成法を参考にして選んだ25の刺激語（家庭、身体、社会の３領域との関係を考慮した）を呈示して文章を書かせた後に、「が」という接続助詞を用いて全体が１つの文章になる様に、もう１つ文章を書かせる課題である。ＳＣＴ－Ｂは施行時間の問題上刺激語の数は制限されるが、「が」の前後での反応の変化にその個人のパーソナリティが反映されるものと思われる。

筆者は、このテストをいくつかの大学等で施行し、「が」の前後の変化にいくつかのパターンがあることを見出した。その反応パターンには以下のようなものがある。

１）肯定・否定
前半で肯定（否定）的感情を述べ、後半で否定（肯定）的な感情を述べるパターン。

２）肯定・肯定
前半でも後半でも肯定的感情を述べるパターン。

３）否定・否定
前半でも後半でも否定的感情を述べるパターン。

４）例外
前半で肯定（否定）しておいて、例外的な否定（肯定）面を述べるパターン。このパターンにはいくつかのバリエーションがある。たとえば前半で肯定（否定）した事物や事象について部分的に否定（肯定）することもあるし、限定された状態になると問題が生じるというような表現もこのパターンである。

５）受容
前半では否定的感情を述べるが、後半でそれを受容するパターン。

６）拒絶
前半では受容したものの後半で否定的感情を述べるパターン。

７）理想・現実
前半で理想、願望、原則などを述べ、後半では実際の状況、現実的問題などを述べるパターン。

８）期待・不安
前半で期待、希望を述べ、後半ではそのことについての不安を述べるパターン。

９）過去・現在
前半、後半で過去と現在の違いについて述べているもの。ただし英文法でいうような大過去と過去の関係の中で違いに言及しているものもこのパターンに入れる。

10）希望
前半で述べた内容に関して後半で希望、願望を述べるパターン。

11）不安
前半で述べた内容に関して後半で不安を表明するパターン。

12）決意
前半で述べた内容に関して後半で決意や努力を表明したり原則、理想を述べるパターン。

13）自己
前半で述べた内容に関して後半で自分に関係づける。

14）説明
前半で述べた内容に関して後半で説明したり気持ちを述べたりするパターン。

15）その他
同じ文章の繰り返しや刺激語に手を加えたりしたもの。

後半に反応がないものと疑問反応（意味の分からないもの、「が」を格助詞として使っているもの）を除いて、以上のどれかに評定する。この反応パターンの評定に関しては、小林哲郎(1985、1986、1985〈学会発表〉）に詳しく解説した。

この反応パターンは、ＭＭＰＩ[2]との相関から、

「肯定・否定」は情緒が安定した寛容な人、「例外」は活動性が高い人、「理想・現実」は男性的な人、「過去・現在」は社会参加を嫌う人、「希望」は活動性が低く、抑鬱傾向が強い人、「不安」は抑圧的な人、「決意」も抑鬱傾向の強い人、「自己」は妄想、強迫傾向の強い人に多いというようなことがわかった。

このＳＣＴ－Ｂの反応パターンの特徴として興味深いことは、控え目で引っ込み思案な人が他者に依存する「希望」のパターンが多かったり、抑圧的な人が「不安」のパターンが多いというように普段は行動に表さない欲求や心理を反応パターンに示していることである。これは、質問紙で測られるような意識的な特徴よりも、その個人のより無意識的な特徴を捉えているためではないかと思われる。即ち、一度完成した文章に「が」をつけてもう一つ文章を作るという検査場面が、その刺激語に関するコンプレックスを刺激して（直接的な無意識の内容ではないにしろ）被検者の普段意識していない欲求とか無意識的な反応様式を引き出すのではないかと考えられる。各刺激語に対する反応内容や反応パターンを総合的に考察することによって、このテストは個人のパーソナリティをダイナミックにとらえる心理検査となると思われるのである。

2．目的

本研究は、ＳＣＴ－Ｂの反応パターンの性質をより明らかにするために、Ｐ－Ｆスタディとの関連について検討を加えることとする。

3．方法

金沢美術工芸大学学生67名、金沢大学医学部付属医療技術短大学生21名計88名（男子39、女子48、平均年齢18．9歳）に心理学に関連した講義時間にＳＣＴ－ＢとＰ－Ｆスタディを集団施行した。

ＳＣＴ－Ｂの反応パターンは、反応数にバラツキがあるので、パーセント得点に直して角変換したものを各パターンの得点とした。Ｐ－Ｆスタディのほうはすべてスコアリングできたものをデータとしたので粗点のままで得点とした。２つのテストの各得点をピアソンの相関係数で

表Ｉ．ＳＣＴ－Ｂの反応パターンとＰ－Ｆスタディの各得点の相関

		肯定否定	肯定肯定	否定否定	例外	受容	拒絶	理想現実	期待不安	過去現在	希望	不安
外罰	障害優位(E')	−0.103	−0.004	0.083	0.213+	−0.146	−0.050	−0.179+	0.039	0.055	0.062	−0.143
	自己防禦（E）	−0.189+	0.007	0.099	−0.117	0.124	0.089	0.104	0.040	−0.055	0.072	−0.091
	要求固執（e）	−0.036	0.050	−0.056	−0.091	−0.133	0.055	0.232*	0.007	−0.131	0.254*	0.202+
内罰	障害優位(I')	0.071	0.195+	0.155	0.117	−0.168	−0.058	−0.068	0.035	0.100	−0.062	0.172
	自己防禦（I）	0.077	−0.055	0.050	−0.061	−0.053	−0.034	0.063	−0.012	0.026	−0.124	0.033
	要求固執（i）	0.119	−0.150	−0.055	0.025	−0.077	−0.042	0.111	−0.058	−0.009	0.007	0.026
無罰	障害優位（M')	0.032	−0.018	−0.140	0.049	0.038	0.099	0.192+	0.008	0.041	−0.091	−0.003
	自己防禦（M）	0.129	0.046	−0.058	0.050	0.157	−0.089	−0.264*	−0.032	0.014	−0.120	−0.073
	要求固執（m）	0.038	−0.102	−0.150	−0.051	0.053	0.013	−0.082	−0.043	0.026	0.014	0.041
外罰（E）		−0.216*	0.026	0.092	−0.042	−0.023	0.075	0.108	0.053	−0.079	0.199+	−0.048
内罰（I）		0.165	0.024	0.134	−0.011	−0.195+	−0.048	0.073	0.012	0.118	−0.161	0.096
無罰（M）		0.131	−0.002	−0.170	0.053	0.150	−0.018	−0.227*	−0.037	0.027	−0.087	−0.010
障害優位		−0.042	0.113	0.056	0.238*	−0.201+	−0.007	−0.050	0.016	0.108	−0.027	−0.007
自己防禦		−0.088	−0.034	0.124	−0.193+	0.243*	0.027	−0.066	−0.018	−0.034	−0.048	−0.113
要求固執		0.061	−0.102	−0.144	−0.071	−0.096	0.019	0.160	−0.049	−0.073	0.170	0.162

＋Ｐ＜0.10　＊Ｐ＜0.05　＊＊Ｐ＜0.01

計算すると表1のようになる（P－Fスタディは外罰、内罰、無罰、障害優位、自我防禦、要求固執のトータル得点と前半3つと後半3つを掛けた9つの個別得点を扱った）。

4．結果と考察

「肯定・否定」はトータルの外罰（E）と負の相関がある。このパターンを多用する人は、MMPIでは情緒が安定した寛容なパーソナリティであったし、TAT[3]では幸福な結末を好むことが分かった。これらの結果から、このパターンを多用する人は、情緒的に安定していて、自己の不安や葛藤を他者に投影する必要がないので、他者のせいにする外罰が有意に少なくなったものと思われる。

「例外」のパターンを多用する人は、障害優位の得点が高い。この相関は、主に外罰の障害優位（E'）との関係によるものである。即ち、このパターンを多用する人は、欲求不満の場面に遭遇したとき、自己主張するとか、他人や自分自身に攻撃の矛先を向けるとか、問題の解決に向かうことをせずに、障害そのものに不快になり不満や失望を表すということになる。「例外」はMMPIではMa（軽そう病）と相関があり、衝動的であることが考えられた。このことから、「例外」を多用する人は活動的、衝動的であり、欲求不満場面では、思いどうりにならない障害にすぐに不満を漏らすという行動をとる人のようである。

決意	自己	説明
−0.244*	0.090	0.238*
−0.051	−0.175	0.100
0.122	−0.089	−0.166
0.084	−0.107	−0.091
0.005	0.065	−0.043
0.006	0.044	−0.047
−0.041	−0.008	−0.114
0.097	0.039	−0.057
−0.013	0.179+	0.052
−0.095	−0.142	0.113
0.070	0.073	−0.141
−0.007	0.100	−0.025
−0.169	0.007	0.099
0.030	0.042	0.028
0.073	0.063	−0.101

「受容」を多用する人は、トータルの内罰（I）と障害優位が少ない傾向があり、自己防禦が多い。このパターンを多用する人は、欲求不満場面に遭遇したときも素直な自我反応をするために自己防御の反応がふえたものと思われる。

「理想・現実」を多用する人は、外罰の要求固執（e）が多く、自己防禦の無罰（M）が少ない。外罰の要求固執（e）は、相手に後始末をしてもらうという行動であり、無罰の自己防禦（M）は「仕方なかったのだから気にしなくていい」という反応である。このパターンを多用する人は、MMPIでは、基本的興味が男性的であり、男性であれば粗野で冒険的であり、女性であれば、競争意識が強いものと考えられた。従って、「理想・現実」を多用する人は、欲求不満事態に遭遇したとき、相手の責任を徹底的に追求して、なんとかしてくれと相手に解決を迫る様な現実的でしっかりした人と思われる。

「希望」のパターンを多用する人も、外罰の要求固執（e）が多い。このパターンも「理想・現実」と同じ様に思われるが、詳しく検討すると多少違う様である。このパターンはMMPIではMa（軽そう病）が低くD（抑鬱）が高い傾向があり、一般的活動性が低く、抑鬱や不安・緊張が高いことがうかがえ、Y－Gテスト[4]では劣等感と相関がある。従って、このパターンを多用する人は、質問紙で測られるような意識レベルでは劣等感を持ち活動性が低いという自己像を持っているのにSCT－Bでは「――してほしい」「――だったらいいのに」というように他力本願な気持ちを示し、P－Fスタディのような欲求不満事態では、相手になんとかしてほしいという反応を多く用いて、投影法で測定されるレベルでは、他者の働きかけを要求する気持ちを見せる。彼らは「理想・現実」の多い人のように現実的でしっかりした人というよりも、より無意識レベルの欲求としては他者になんとかして欲しいという気持ちがあるのに、現実にはそれが言えないような人ではないかと思われる。

「決意」のパターンを多用する人は、外罰の障害優位（E'）の反応が少ない。このパターンは「――しよう」とか「――であるべきだ」と

いうように自分の努力で頑張ろうとしたり、原則に固執する態度であり、MMPIではD（抑鬱）とは相関傾向、Pt（精神衰弱）と相関があり、鬱病の病前性格である几張面さとか完全癖との関連が考えられた。また、TATでは社会的承認欲求が高く、社会に自分を合わそうと努力を続ける人であろうと思われる。従って、彼らにとって、欲求不満場面であっても文句を言わず我慢することが価値のあることであり、すぐに不満を表明するという外罰の障害優位(E')だけが少なくなったものと考えられる。

「説明」を多用する人は「決意」とは逆に外罰の障害優位（E'）の反応が多い。このパターンを多用する人はY－Gテストでは活動性、社会的外向性が高く、TATでは独立欲求が高く、幸福な結末が少ない。これらのことから、自己顕示欲が強くわがままなタイプの人が想像できる。従って、彼らは欲求不満場面に遭遇すると、すぐに不満を表明してしまうので、外罰の障害優位（E'）の反応が増えたと考えることが出来るだろう。

5．結論

以上のように、今までの研究の結果を援用することによって、いくつかの反応パターンの性質が次第に明らかにされてきた。とくに、「希望」のパターンのように投影法で測定されるレベルでは他者に依存する欲求があるのに、質問紙で測られる意識レベルでは活動性が低く劣等感が強くて現実には他者に積極的には働きかけができないような人がいることがわかりパーソナリティをダイナミックに捉えるという点で興味深い結果が得られた。このSCT－Bの反応パターンによる分析は、全てのパターンの性質がハッキリしたわけでもないしまだ十分とは言えないが今後はこのような反応パターンの性質を検討する研究と同時に、神経症、精神病の人たちの反応や、非行問題を起こす人たちの反応の特徴からこのテストを臨床場面に適応できるかどうかの検討もしてみたい。

注

(1) ローゼンツアイクによって考案された絵画－欲求不満テスト。24の欲求不満場面が漫画で表現されており、各々の場面状況に被検者がおかれた時どのような言語反応をするかを絵のふきだしに記入する形式で答えるものである。各々の反応は相手を責める外罰、自分を責める内罰、どちらも責めない無罰の3つの態度と障害にこだわる障害優位、気持ちを表現する自己防御、解決を考える要求固執の3つの態度を組み合わせた9つの態度のどれに当たるかが評定される。

(2) ミネソタ多面人格目録。精神科患者の症状を元に作成された質問紙形式の性格検査。

(3) 絵画統覚検査。すこしぼやかした絵を見ながらその人なりのストーリーを作ってもらい、その内容からその人の無意識の欲求を推察する投影法テスト。

(4) 谷田部－ギルフォード性格検査。正常者の性格特性を元にその人のパーソナリティを12の性格特性で表す質問紙形式の性格検査。

参考文献

* Graham, J. R. 1977 The MMPI : A Practical Guide. Oxford University Press,（田中富士男訳 1985 MMPI—臨床解釈の実際— 三京房）
* 小林哲郎 1985 SCT－Bの評定について—評定者間の評定の一致率の検討— 日本心理学会第49回大会発表論文集 240
* 小林哲郎 1985 SCT－Bの評定について 金沢美術工芸大学学報 第29号 35-44
* 小林哲郎 1986 SCT－Bの評定について—項目別の反応パターンの検討— 金沢美術工芸大学学報 第30号 39-45
* 佐野勝男・槙田仁 1961 精研式文章完成法テスト解説 金子書房
* 住田勝美・林勝造・一谷彊編著 P－Fスタディ使用手引 三京房